

# 高等学校「歴史総合」における未来洞察型歴史学習の授業開発 －「域内経済システム」の視点に着目して－

Development of a Lesson for the Foresight Type History Learning in High School“Modern and Contemporary History”:Focusing on the Perspective of“Regional Economic System”

岩橋 嘉大  
(兵庫県立青雲高等学校)

キーワード：未来洞察，歴史総合，域内経済システム，現代的な諸課題，認識変容

Key Words : Foresight, Modern and Contemporary History, Regional Economic System, Contemporary Issues, Cognitive Transformation

## I. 問題の所在

本研究の目的は未来洞察の学習過程における認識変容のプロセスを明らかにし，未来洞察型歴史学習の授業を開発することである。

2022年度から高等学校で実施されることとなった「歴史総合」は，日本と世界の相互的な視野のもと，「現代的な諸課題」の解決をめざして近現代の歴史を考察する科目である<sup>(1)</sup>。このようなグローバルな視野で現代社会の課題解決を志向する歴史科目の登場は，市民性育成の観点から「歴史的思考力とは何か」を問うことになった<sup>(2)</sup>。

また，社会科教育においては，これまで社会の形成に開かれた子どもの価値観を育成する歴史教育のあり方が議論されてきた。溝口(2012)は意思決定における価値的知識の形成の視点を導入した歴史教育の内容編成原理を明らかにし，単元開発を行った。特に，歴史的に形成されてきた社会を編成する多様な原理を比較し，原理間の関係を捉えることを可能にした内容編成モデルの提案に意義が認められる。また，宮本ほか(2014)の研究では社会問題を言説として認識させ，その使用方法についての歴史的認識から社会問題の構造的理解を図り，言語使用についての社会的認識へと再構築させている。この研究は，国家や社会の問題に対して，歴史教育を通じて「主体的な市民的資質の育成」が目指されている点において示唆に富むものといえる<sup>(3)</sup>。

先行研究からこれまでの歴史教育では，歴史でみられる制度や言説に内包された価値観を捉え，個人の価値観を踏まえて社会問題の解決を図るこ

とで，開かれた価値観形成が目指されてきたことがわかる。また，近年では授業実践において，「復興災害」という課題に着目し，「歴史の教訓」を踏まえて課題の解決や理解を図る西村(2019)の研究や「人口移動」をテーマとして，グローバルヒストリーの授業を開発・実践した中村ほか(2020)の研究などが見られる。これらは市民性を育成する未来志向の歴史学習として意義ある授業実践研究だといえる<sup>(4)</sup>。

一方，歴史的に形成されてきた法制度や社会への考察から原理的に導かれた価値観は，具体的にどのような社会像として結実しうるのだろうか。社会の構造的理解や価値観育成を図ってきた歴史教育は，「未来」の社会形成にどのように位置づいていくのかという点において，確固たる道筋を見出せていない状況にあるといえる。もちろんVUCAの時代といわれる現代社会において，未来社会の推移や変化を正確に予測することは困難である<sup>(5)</sup>。しかし，だからといって未来の社会を歴史教育の対象から捨象することはできない。熊田(2017)が述べているように，歴史学習は未来を構想する「根拠や足場」として機能し，多様な未来社会を考察する道筋を切り拓く基盤的な役割を果たす<sup>(6)</sup>。

では，教育においてそもそも未来を捉えるとは，どのような営みをさし，その目的は何であろうか。

セルビー・バイクは未来を「可能性の領域」として捉え，「可能性のある未来」(possible futures)，「ほぼ確実な未来」(probable futures)，「望ましい未来」(preferred futures)の3つに分類で

きると述べた。そして、未来志向の教育について、未来の予測はその一部でしかなく、「何が確実かを知る（確実性に関する知識）」というより、何が可能かを知る（可能性に関する知識）ための教育であると説明している<sup>(7)</sup>。

ここから未来を捉えるとは、単に予測を意味するだけではなく、複数の未来の構想や選択によって可能性を探究することであるといえる。また、予測が困難とされる現代社会において価値観の吟味を図り、未来社会のあり方を構想する方法論の確立は、社会科教育においても不可避の課題となってきた。

近年、社会科教育の分野では小学校を中心に未来の多様な社会のあり様を創造する授業の研究が見られるようになってきた。澁谷（2021）は「今日の予測困難な社会の変化に主体的に関わり、希望のある未来を描く児童」の育成を目指す未来洞察型の授業開発を行い、イギリスのデイビッド・ヒックスの理論に依拠した公民分野を中心とする授業を提案した<sup>(8)</sup>。一方、歴史分野の授業事例は提示されておらず、未来洞察型歴史学習の検討がなされていない点を課題として指摘できる。

1990年代に未来教育を提唱したヒックス（1994）は、オルタナティブな未来を想像するためには出来事を年代順に配列するなど、時間の感覚を発達させる歴史の技能が必要であることを指摘した<sup>(9)</sup>。また、歴史学習における事象の解釈は過去と同様に未来への感覚にも適用できることに言及しており、「未来をより批判的、創造的に思考することを確実にする手助けとなる」と述べた<sup>(10)</sup>。このようなヒックスの主張は、「個人や集団の選択・判断の積み重ね」として歴史的に継承されてきた「現代的な諸課題」を展望する「歴史総合」の学習に重要な示唆を与えるといえるだろう<sup>(11)</sup>。

以上に示したように、本研究では、歴史教育の課題である生徒の価値観を未来の可能性に向けてどのように開かせることができるのかを問いとして、認識変容のプロセスを明らかにしたうえで、未来洞察型歴史学習の授業を開発する。

本研究では、次の手順で論を進める。Ⅱで未来洞察の方法論や認識変容のプロセスに基づいた歴史学習を論じ、Ⅲでは、「グローバル化を構造的

に捉えるために、なぜ、域内経済システムに着目するのか？」を論じ、未来洞察型歴史学習の授業構成を提示する。Ⅳでは単元の具体的な流れを示し、Ⅴで研究の成果と課題を整理する。

## Ⅱ. 認識変容プロセスに着目した未来洞察型歴史学習

未来洞察型の歴史学習を進めるには、どのような方法論が必要になるだろうか。本章では、未来洞察型歴史学習のあり方を明らかにする。

### 1. 未来洞察型教育理論の意義

未来洞察型教育理論とはどのような目標を目指すことになるのだろうか。本節では未来洞察と未来予測の違いを示し、この問いを明らかにする。

未来洞察の方法論を示した鷺田（2016）は、「演繹的な未来予測」と「帰納的な未来洞察」に分類し、以下のように対比的に説明した（表1）<sup>(12)</sup>。

表1 未来予測と未来洞察の比較

	未来予測 (forecast)	未来洞察 (foresight)
未来の捉え方	現在の線形な延長線上	非線形な未来変化
未来の描き方	演繹的	帰納的

（鷺田（2016）より筆者作成）

鷺田は、従来の未来に向けたシナリオの描き方が「演繹型推論の手法が主流だった」ことに言及し、「未来予測（forecast）」には「従来とは違う方向性の出来事が発生した時に、実際にどのような現象が発生するのかをシナリオ化する力が弱いという特徴がある」と述べた。一方、「未来洞察（foresight）」は非線形な未来変化を前提とする帰納推論型手法であり、「不確実な未来の兆しを捉え、視点の拡張を促す」特徴があると指摘した。

このように未来を現在の延長線上にある変化として捉える「未来予測」と非線形な未来変化として捉える「未来洞察」は手法として対をなす。

そして、不確実性が高く、予測困難な未来を見据える学習指導要領の基本的な考え方を踏まえると、主体的に未来と向き合い、課題解決を図る資質・能力を育成するためには、「未来洞察」の手法が適しており、目標に迫る方法論として位置付けることができる。

## 2. 未来洞察における認識変容のプロセス

本節では未来洞察の思考過程を踏まえ、認識変容のプロセスを明らかにする。

非線形の未来変化を起こす未来洞察型の思考過程とは、どのようなものだろうか。ヒックスは、未来型思考について、①未来の予測、②影響の受容、③オルタナティブな未来の構想、④未来の選択、⑤責任ある行動の5つの段階を主張した<sup>(13)</sup>。つまり、①②では演繹的な未来予測を行うことで、現状の延長線上に未来を捉え、「未来はこうなっていく」という予測を行い、社会的な影響を考察する。そして、③④では帰納的に未来を描き、現状の延長線上とは異なる未来を描く未来洞察を行い、よりよい未来の選択が⑤の責任ある行動へと結びつくという思考過程となる。

では、未来洞察を行う場合、認識はどのように変容することになるのだろうか。新井(2021)は未来創造における認識変容のプロセスとして、「reframing」、「reperception」「reflective interaction」から成る枠組みを示した(表2)<sup>(14)</sup>。

表2 未来創造における認識変容のプロセス

reframing	物事を見ている枠組みの見直し
reperception	自分が抱いている認識の見直し
reflective interaction	内省を伴ったくり返し

(新井(2021)より筆者作成)

不確実な未来であるという前提に立った場合、未来を構想する際の認識変容のプロセスは、「(物事を見ている)枠組みの見直し」を意味する「reframing」と「(自分が抱いている)認識の見直し」を意味する「reperception」から成るサイクルを繰り返すプロセスとして説明できる。そして、このサイクルを振り返り、見直す「reflective interaction」(内省を伴ったくり返し)が必要となる。このことから、未来洞察を行う生徒の認識変容プロセスとして、未来を現状の延長線上にある1つの未来として捉えるのではなく、未来は不確実であるという前提に立つことで、複数の未来の可能性があるという「枠組みの見直し(reframing)」が行われる。そして、この未来を捉える枠組みの変化によって、これまでの認識の前提が改められる「認識の見直し(reperception)」が起こり、こ

のサイクルを見直すことで未来洞察へとつながるという認識変容のプロセスとなる。

## 3. 未来洞察の基盤としての歴史学習の役割

本節では、未来洞察において歴史学習をどのように位置づけることができるかについて論ずる。

鈴木(2015)は、歴史的思考力を歴史事象とその解釈を歴史的全体性の中に位置づけ、「現代社会の在り方」を問い直し、未来社会を構想する基盤となる知的能力として説明した<sup>(15)</sup>。

ここから歴史学習は過去を多面的・多角的に考察、解釈し、現代社会を問い直す学習となることがわかる。このような特徴を持つ歴史学習の認識変容プロセスは、未来洞察と同様に過去の歴史的な事象や解釈に対する「reframing」や「reperception」が繰り返されるプロセスだといえる。そして、歴史学習は非線形的な未来を構想する未来洞察の「reframing:(物事を見ている)枠組みの見直し」に円滑に結びつくことが可能となる。

つまり、このような歴史学習における認識変容の蓄積が、最終的には現代社会を批判的に問い直すことに結びつき、未来洞察における構想プロセスの基盤としての役割を果たすことがわかる。

特に、高等学校の「歴史総合」では、現代的な諸課題の解決を視野に入れ、課題が形成されてきた歴史的経緯を考察する学習過程となる。このため、生徒の過去・現在・未来に対する認識変容を図ることは、重要な意味を持つ。

原田(2019)は、「歴史総合」の授業づくりにおいて、歴史を未来へと活用する課題追究型主題学習を主張した。そして、例えば、問いを生み出す過程において、生徒間で多様に出た問いの妥当性を議論する重要性に言及し、同世代の生徒間でも「自己とは異なる見方・考え方があり、それには一定の理由がある」という認識は、過去への構えを謙虚にする」と説明した<sup>(16)</sup>。

ここから、歴史学習の段階における、生徒間の認識変容を促す学習コミュニティの構築の重要性を指摘でき、未来洞察を見据えた歴史学習のあり方が導かれる。つまり、歴史学習の方法論において、協働的な議論を通じた多面的・多角的な考察や解釈を積み重ねることで学習コミュニティを築き、未来の創造にいかす未来洞察型歴史学習のあり方が求められることとなる。一方、このような

視点から歴史学習を捉えた場合、歴史学習が未来洞察に対して果たす役割は、未来を変革する「責任ある行動」に直接的に結びつくのではなく、大枠としての構想の軸を提供し、生徒の行動への動機を高めることに限定されることがわかる。

以上を踏まえ、本研究における「未来予測」を、「歴史学習を踏まえ、現在の延長線上に未来を考察・構想すること」、「未来洞察」を「未来予測を踏まえ、現代的な諸課題の解決を図る多様な未来社会を考察・構想すること」と定義する。

### Ⅲ. 「域内経済システム」の視点から「グローバル化」を問い直す授業構成の提案

本研究では、「歴史総合」の大項目D「グローバル化と私たち」における授業開発を行う。本単元では、「歴史総合」における総括的な位置づけである「現代的な諸課題の形成と展望」が設けられ、未来洞察型歴史学習に適しているといえる。

本章では、グローバル化を構造的に捉える「域内経済システム」の視点に着目した未来洞察型歴史学習の授業構成を提示する。

#### 1. 歴史学習において「経済システム」の視点に着目する意義

本研究では、グローバル化を構造として捉える「域内経済システム」の視点に着目する。

「構造」に着目した先行研究としては紙田(2010)の研究がある。紙田は、小学校の歴史学習において、江戸時代の経済構造から「江戸システム」を抽出し、変革をめざす授業開発を行った。歴史学習において、幕藩体制が市場経済に変換されていく構造の変革を捉え、「自分の置かれている現在の<構造>を相対化し、その価値観の是非を問い直す」歴史認識の育成をめざした。紙田の研究を踏まえると、歴史学習に経済的な視点を取り入れることは、①庶民の生活（ミクロな視点）から時代の構造をリアルに捉え、②構造の変革へとつながるといえることがわかる。また、池野(2006)は市民社会科歴史教育において、「見えないシステムを子どもたちに見えるようにすること」が、社会構築への参画意識(participation)につながることを期待できると述べた。つまり、システムが可視化されることで社会構造の理解に繋がり、社会を構築的なものとして捉え、再構築に向けた参

画意識が醸成されていくことがわかる<sup>(17)</sup>。

紙田ならびに池野の研究を踏まえると、「経済システム」の視点に着目することは、生徒に身近なミクロの視点から社会構造を捉えさせ、現状をどのように変革し、再構築すべきなのかを主体的に構想する態度を培う意義があると理解できる。

したがって、未来洞察型歴史学習においても、「グローバル化」を身近な視点から社会全体の構造を捉える視点として、「経済システム」の視点を取り入れる意義は大きい。

#### 2. 「域内経済システム」の定義

経済的な視点に着目して社会を構造的に把握しようとした研究は、これまでも広く行われてきた。岩野(2006)は、「石油」や「情報」などの身近なものに着目し、経済を通して社会がわかる授業開発を行った。また、経済的視点に着目した歴史学習は、谷口(2002)の研究にも見られるアプローチであり、身近なモノや人々の生活から入り、国際関係や社会全体の構造の把握を可能にする<sup>(18)</sup>。

こうした先行研究を踏まえると、経済的視点の次のような特徴が見えてくる。①身近なスケール(ミクロ)から社会や世界全体(マクロ)を構造的に把握しようとする点。②ヒト・モノの流れや移動が循環を生み出し、システムとして構造化される点。③経済システムが社会の特質や課題を提示し、未来洞察への基盤となる点。

このことから、本研究では「域内経済システム」を「一定の地域における利潤を求めてヒト・モノ・カネ・情報が移動し、循環する構造的な仕組み」と定義する。

#### 3. 「域内経済システム」が価値観の吟味へと結びつく未来洞察型歴史学習のプロセス

ここでは、「域内経済システム」の視点に着目した追究が、どのように価値吟味や未来洞察の学習過程に結びつくのかを説明する。以下に、本研究における学習プロセスを示す(図1)。

近現代の「域内経済システム」の特質と課題は、同時代の異なる空間や時代間の比較によって歴史的に考察できる。「域内経済システム」の特質の面では、「グローバル化」が進行する当時の社会情勢や地理的環境に応じた構造的な仕組みが形成されることを歴史的に考察していくことがで

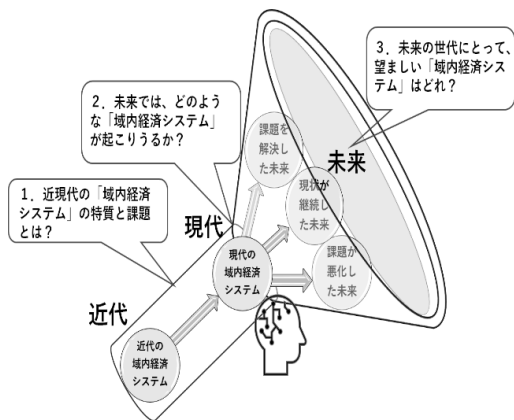


図1 「域内経済システム」の視点に着目した未来洞察型歴史学習のプロセス (筆者作成)

きる。

一方、利潤の極大化や拡大を志向するシステムは、公害や地球環境問題、国内外の貧富の格差などの現代的な諸課題を生み出し、課題が形成されてきた経緯の理解へと結びつく。石井（2021）が指摘するように経済や社会が「地球システム」と密接に結びついた構造的な視点の獲得こそが未来世代のために、自分たちに何ができるのかを問い直すことにつながる事となる<sup>(19)</sup>。

また、近現代の「域内経済システム」の特質と課題を踏まえて未来を予測し、特定の未来が実現した社会の様子を具体的に描く。これは、Hicksの futures skills の①未来の予測、②影響の受容にあたり、歴史的考察から想定可能な未来を構想する学習過程となる。次に、自分の生活状況などに結び付けるなどして、課題を乗り越えた未来など、多様な「起こりうる未来」を構想する。ここには、幅広い未来像が想定されるものの、「現代的な諸課題」を解決した希望の未来や想定外の未来も含まれ、未来洞察によって複数の未来の存在に気付く③オルタナティブな未来を構想する段階となる。

そして、④「未来の選択」の段階では「望ましい未来」を選択する。ここには当然、生徒の価値観が反映されることとなる。この時に選択した未来社会で「利益を得る立場」、「利益を失う立場」を考慮し、異なる価値観の吟味によって自己の価値

観の自覚化が図られる。そして、自己が選択した未来像を実現するためには、どのような変化を生み出す必要があるかを考察、構想させることで⑤責任ある行動の学習段階に結びつく。

このように未来洞察型歴史学習は解決策の提示にとどまらず、具体的な未来像をシナリオや絵画などの形で明確に描き出す点に特徴がある。これによって歴史的考察を踏まえた現在の選択や判断がどのような未来社会として実現し、影響を与えるのかを多面的・多角的に考察、構想できる。また、未来を選択する過程では対話によって価値観の吟味を図り、生徒それぞれが「望ましい未来」を特定し、地球環境を考慮した「よりよい社会」を実現する社会参画への意識を培うことができる。

以上が「域内経済システム」の視点に着目して歴史学習を未来洞察へと結びつけた未来洞察型歴史学習のプロセスとなる。

#### 4. 授業構成の提示

本研究の授業構成を以下に提示する（表3）。

表3 「域内経済システム」に着目した未来洞察型歴史学習の授業構成

		段階
近現代史の 考察	I	問題意識の喚起
	II	歴史的経緯から「域内経済システム」の特質と課題を把握
未来の構想	III	歴史的考察を踏まえた未来予測
	IV	「起こりうる未来」を構想し、価値観の吟味を図る

(筆者作成)

第I段階は、世界各地の暮らしぶりの格差からグローバル化が日常生活にもたらす影響を捉え、生徒の問題意識をミクロな視点から国際社会の構造に結びつける。居住地域間で生じる生活レベルの違いを問い、生徒の生活や地球環境との関わりに気付かせ、経済成長のあり方に問いを持たせる。

第II段階では、「域内経済システム」に着目し、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて移動し、グローバル化が進展する過程を捉える。また、当時の国際情勢や地理的な制約から「域内経済システム」が持つ特質を捉え、社会や環境への影響の

観点から生み出された課題を考察する。近現代の変遷からグローバル化の進展が与えた影響を議論し、その長所や短所に気付いていくことで、生徒のグローバル化に対する認識を再構成する段階として位置付けられる。

第Ⅲ段階では、歴史的考察を踏まえた未来予測を行い、具体的な未来社会の姿を描き出す。

「域内経済システム」の歴史的経緯にみられた特質と課題を踏まえ、「現状が継続」していく未来を構想する。資源の大量消費や格差問題が引き継がれた未来社会への不安や失望は、持続可能な未来社会のあり方に向けて「域内経済システム」のあり方を問い直すことにつながる。

第Ⅳ段階では、歴史的考察を踏まえた「起こりうる未来」を具体的に構想し、「望ましい未来」を選択する段階となる。「起こりうる未来」の構想では歴史的な考察から得られた特質を踏まえ、課題を克服した未来像の描写が想定されるほか、自己の生活環境に根差した現実的な分析からの未来の提案も起こりうる。多様な未来のあり方が可視化されることで生徒の未来を捉える枠組みは **reframing** され、未来への希望にも開かれる。

このような複数の未来を具体的に描写した後、「望ましい未来」の選択を行う。選択した未来について立場による利益・不利益を考慮することで、生徒は構想した未来像が特定の価値観を内包していることに気付く。そして、他者が選択した未来との比較を通じて、価値観の違いを吟味していくことで持続可能な未来の創り手としての認識の再構成 (**reperception**) が図られることとなる。

#### Ⅳ. 「域内経済システム」の視点に着目して未来を洞察する「歴史総合」の授業開発

##### 1. 学習内容の設定

本研究の学習内容としては、グローバルヒストリー研究の成果である「アジア間貿易」と「東アジアの奇跡」を取り扱う。戦前の「アジア間貿易」では、ミクロな視点から近代の「域内経済システム」の形成と構造を捉え、現代の先進国と開発途上国との間に見られる経済構造との共通点に気付かせる。また、覇権国家イギリスとアジア間貿易の関係に着目させ、グローバル化のメリットやデメリットを対話的に考察させることができる。

次に戦後の「東アジアの奇跡」ではアジア経済が世界経済の成長を誘発したというグローバルなスケールへとつながる。一方、経済システムに入れなかった地域との格差拡大を招き、地球環境問題への懸念が高まるなどの現代的な諸課題にも結びつき、未来の構想へとつなげることができる。

##### 2. 学習方法の選択

本研究では、学習コミュニティの構築を見据え、ジグソー法を学習活動の中心に据える。これによって他者と多面的・多角的な視点から対話的に資料を考察させ、**reframing** や **reperception** の学習サイクルを繰り返す。また、学習の節目で **ARR** シートを記入させる。**ARR** シートとは、**Anticipation** (見通し) - **Revision** (構想) - **Reflection** (振り返り) のサイクルによって自己の認識の変化や他者の視点への気付き、疑問などを振り返り、未来を構想する学習コミュニティの構築に結びつけるために、本研究で開発したシートである<sup>(20)</sup>。本来であれば、**Anticipation** (見通し) - **Action** (行動) - **Reflection** (振り返り) のサイクルであるが、本研究では第Ⅱ章で示した未来洞察における歴史学習の位置づけから、本研究の射程として行動ではなく、構想の段階に留めている。

##### 3. 授業開発単位『「グローバル化」の進展によるアジア間貿易、東アジアの奇跡』(全11時間)

第Ⅲ章で示した授業構成に基づいて開発した単元の主な流れを以下に示す(表4)。

第Ⅰ次では、現代社会への問いを表現する。ここでは、生徒の生活空間をグローバルな視座から問い直すことをねらいとする。例えば、映像資料①から先進国の人々が歯ブラシで歯を磨くのに対し、マラウイの女性が指で歯磨きをする場面が登場する。このような居住地域による生活の違いから構造化された世界に意識を向けさせる。

また、アジア経済の歴史的な衰退や繁栄から、現代社会が抱える諸課題を示す。これによって「グローバル化」が抱える光と影の部分に注目させ、テクノロジーが発展する日本・中国・韓国と生徒自身の生活、地球環境問題や経済格差を踏まえ、現代社会をどのように評価するのかを書かせる。最後に、**ARR** シートを記入してグローバル化への印象や今後の学習の見通しを記入する。

第Ⅱ次では、域内経済システムの視点から、歴

表4 授業単元『『グローバル化』の進展によるアジア間貿易，東アジアの奇跡』の概要

単 元 目 標	①利潤を追求してヒト・モノ・情報・カネなどの移動によって構造化される「域内経済システム」の視点から「グローバル化」の形成や自己の生活とのつながりを理解できる。(知識・技能) ②東アジアの「域内経済システム」の特質と課題を考察し，課題解決を視野に入れて「起こりうる未来」を多面的・多角的に追究できる。(思考・判断・表現) ③他者との対話や協力をもとに，持続可能な「域内経済システム」のあり方を構想できる。(主体的に学習する態度)		
時	主な発問 (◎は主発問)	資料	生徒の反応
I 「現代社会」への問い直し			
第 一 時	◎現代社会が抱える課題への問いを立てよう。 ○あなたは現代社会をどのように評価するか？	① ② ③ ④	・グローバル化とはどのように起こったのだろうか？ ・グローバル化によってもたらされたメリット・デメリットは何か？ ・アジア経済は，なぜ現代のような成長が見られているのか？ ・ <b>なぜ，環境問題を考慮せずに，経済成長が押し進められてきたのか？</b> ・ <b>なぜ，世界は豊かな国と貧しい国とに分かれているのか？</b> ・ <b>グローバル化は今後，世界にどのような影響を与えるのだろうか？</b>
	<u>ARRシート①記入</u>		・開発途上国から見た「グローバル化」のメリット・デメリットを整理したい。 ・日本の暮らしは世界で中間層だと認識していたが，上位に位置することに驚いた。
II 「グローバル化」の歴史的経緯から特質と課題を把握する			
第 二 時	◎英領インドは東アジアとの関係においてどのような役割を果たしたか？	⑤ ⑥	・英領インドの綿花輸出は，東アジアの国々の相互利益のための関係を持たせ，相互につなぐ役割を果たしたのではないか。 ・アジア間で形成された経済システムにおいて，イギリスは東アジア内での競争に耐えきれず，脱落を余儀なくされた。
	◎なぜ，非ヨーロッパ地域でアジアのみ地域間貿易が発展したのか ○なぜ，東南アジアは大量の生活雑貨品を必要としたのだろうか？	⑦ ⑧ ⑨	⑦ <b>原料(綿花や食糧)や商人(印僱・華僱)，労働力(苦力)</b> を域内で調達することができ， <b>国際分業体制を確立</b> することでアジア域内における「域内経済システム」が確立されたから。 ⑧ ⑨ 海底通信ケーブルや銀行など，技術や資本の面では列強諸国から提供を受けていたので，アジアの自立は相対的なレベルに留まっていたのではないだろうか。
	◎19世紀末に「世界の工場」としての地位を失ったイギリスが，なぜ20世紀初頭においても世界経済の中心であり続けられたのか？	⑩ ⑪	⑩ ・イギリスはポンドや海底通信ケーブル，英語などの国際公共財を提供することでイギリス中心の世界の構造を形成し，覇権国家として君臨することとなったから。 ⑪ <b>イギリスのような世界の中心となる国と世界の周辺に置かれる国に世界が構造化されていく</b> ことになり，周辺国は搾取の対象となり，経済発展が停滞するという問題が生じてきたのではないだろうか。
	<u>ARRシート②記入</u>		ひとつの問題に対して異なる視点から資料を見たり， <b>他者の意見が重要</b> だと感じました。私たちがなぜ，英語を学んでいるのかについて気付くことができました。
第 五 時	◎なぜ，世界でも最貧国に陥った日本が経済大国へと飛躍したのか？ ○今日の授業をふまえ日本の高度経済成長をあなたはどのように評価するか。	⑫ ⑬ ⑭ ⑮	⑫ ⑬ ・日本は中東から原油を輸入し，戦後の冷戦構造によるアメリカとの分業体制のうで「オイル・トライアングル」とよばれる「経済システム」を形成し，家電製品などの民需に特化した商品を輸出することで飛躍的な経済成長を果たしていった。 ⑭ ⑮ ・高度経済成長は新幹線の開通などの交通網の拡大や石油コンビナートの開発を促進することとなった一方，水俣病などの公害が社会問題となったことから成長のみを追求する経済のあり方を問い直す必要も出てきた。
	◎「東アジアの奇跡」の特質は，なぜ生み出されたのだろうか？ ○「東アジアの奇跡」の特質を通して世界が抱えるどのような課題が見えてくるか。	⑯ ⑰	⑯ ⑰ ・「オイル・トライアングル」が日本だけでなく，東アジアに拡大した。 <b>東アジアは人口が多く，労働力を集約して経済発展を図った点が特質としてあり</b> ，ここにアメリカからの技術や機械の輸入などがあって爆発的に成長した。しかし，「オイル・トライアングル」から取り残された国々は，未だに人間らしい生活を送ることができていない国も見られる。このように <b>経済格差の拡大という課題は現代社会にも継承されている</b> といえる。また，東アジアも資源の消費が増大してきており， <b>地球環境に多大な影響を与えるようになってきている</b> 。
	<u>ARRシート③記入</u>		
III 歴史的考察を踏まえた未来予測			
第 六 時	◎21世紀における望ましい経済のあり方とは		・東アジアの「域内経済システム」の特質への歴史的考察から，集約的に投入されたのが資源・資本なのか，労働力なのか分岐点となる。また，「グローバル化」

七 八 時	<p>？</p> <p>○「アジア間貿易」と「東アジアの奇跡」からの特質と課題を踏まえ、資料は各班で収集・調査し、2050年の東アジアの未来を予測し、イラスト化するなど具体的に描きなさい。</p>	<p>の長所・短所を踏まえ、今後グローバル化とローカル化のどちらが求められていくのかも論点となる。①資源・資本集約型グローバル化、②労働集約型グローバル化、③労働集約型ローカル化、④資源・資本集約型ローカル化に分類できる。</p> <p><b>【予測した未来】</b> 東アジア圏は②に該当し、労働力を主体として資源節約型ではあったが、現在では大量の石油や天然ガスなどを輸入し、資源を消費する経済である。しかし、2050年には急速な少子高齢化社会を迎え、発展は頭打ちになっていくことが見込まれる。国内外で経済格差が生じ、外国人労働者の増加や地球の平均気温の上昇が起こる未来が予測され、私たちや未来世代の生活にも大きな影響が出ることが想定される。</p>
IV「起こりうる未来」を構想し、価値観の吟味を図る		
第九 十 一 時	<p>○2050年に「起こりうる未来」を構想します。①、③、④または⑤その他の未来についても班内で役割を決め、ジグソー法を活用してエキスパート班でシナリオとイラストを作成しよう。</p> <p>○ジグソー活動として、各エキスパートが作成した未来像を共有し、未来世代にとって「望ましい未来」を選択しなさい。</p> <p>○なぜ、あなたはその未来を望むのか？その未来はだれにとって利益、もしくは不利益になるだろうか。相手の選んだ未来との相違点を踏まえ、説明しよう。</p>	<p><b>【起こりうる未来】</b> ①資源・資本集約型グローバル化 地球資源をグローバルに収奪し、先進国はますます富み、開発途上国は搾取されることで経済格差が拡大する。また、地球環境問題が深刻化し、日本の夏はもはや不要不急の外出は控えることが常識となる。</p> <p>③労働集約型ローカル化 コミュニティを発展させ、自動車の使用が限定的になり、歩行者中心のまちづくりに取り組む地域が増える。日本の商店街では、シャッター街がなくなり、少子高齢化にも改善のきざしが見え始める。地域の伝統や祭礼なども、若い世代の参加によって盛り上がりが見える。</p> <p>④資源・資本集約型ローカル化 金融サービスや医療、森林や水などは共同管理によって、地域にある資源を循環させ、グローバルな輸入にできるだけ頼らない持続可能な経済システムとなる。地産地消が重視され、24時間営業の店はなくなっていく。また、海外の食べ物や商品を得たり、遠出する機会も減る。</p> <p>⑤その他 テクノロジーの進展によって、クリーンエネルギーの普及が急速に進み、開発途上国にも技術が普及する。AIが発展し、労働にも無駄がなくなったことで週休3日制となり、経済格差の縮小や地球環境問題の進行が緩和し、趣味や余暇を楽しむ時間が増える。</p> <p><b>【望ましい未来】</b>（④を選んだ生徒） 20世紀の東アジア地域の経済成長は、私たちの暮らしを豊かなものにした。一方、地球に深刻なダメージを与えている事実は、放置できないものとなっている。また、日本の少子高齢化の課題とも考え合わせると、未来においては拡大を志向するよりも、<b>地元や地域といったレベルでいかに持続可能な「域内経済システム」を構築するかが重要</b>だと考えた。もちろん、このような未来像は、私が日本に住んでいるからこそ描けるものであって、貧困や過酷な労働に苦しむ地域においては、異なる未来像の選択が考えられる。拡大を志向する人々といかに手を取り合ってパートナーシップを築くかという点も、重要な課題となる。</p>
	<p><b>ARRシート③記入</b></p>	<p>歴史を勉強することは未来について考えることにつながると気がきました。<b>歴史を知るだけでなく、友達と考え、新しい発想に結びつける学びが重要だと思いました。</b>望ましい未来をどのように実現することができるか、考えてみたいと思います。</p>
<p><b>【主な資料の出典】</b>①「世界の人々の暮らしを所得別に見てみよう」（映像資料）See how the rest of the world lives, organized by income   Anna Rosling Rönnlund, ②「世界のGDPの比重の変化」・⑨「英領マラヤ発展の背景」・⑩「シティの繁栄」・⑪「国際公共財」秋田茂（2016）『イギリス帝国の歴史 アジアから考える』中公新書, ③「地球温暖化の未来」鬼頭昭雄（2020）『異常気象と地球温暖化—未来に何が待っているか』岩波新書, ④「誰かブレーキを踏んでもらえませんか?」『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来』（ユヴァル・ノア・ハラリ）, ⑦「渋沢栄一とタタ商会」桃木至朗・秋田茂（2013）『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会, ⑤「アヘンから綿糸へ」・⑥「アジア間競争」杉原薫（1997）『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房, ⑧大石高志ほか（2005）『華僑・印僑ネットワークとアジア広域秩序：歴史的検討と現代的意義』大学研究助成アジア歴史研究報告書2007年度, ⑫「各国の軍事支出」・⑭「日本のオイル・トライアングル」・⑯「アジア間貿易と世界のコンテナの荷動き」・⑰「オイル・トライアングルの拡大」杉原薫（2020）『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会, ⑬「日米安全保障条約の骨子」浜島書店編集部（2018）『新詳日本史』浜島書店, ⑮「水俣病」栗原彬（2000）『証言 水俣病』岩波新書</p>		

（第Ⅰ段階は問題意識、第Ⅱ段階は「域内経済システム」の構造や特質、第Ⅳ段階は価値観に関わる箇所）  
下線 筆者作成）



史的に形成されてきた「グローバル化」の特質と課題を捉える。

「アジア間貿易」では、国際的分業や競争によって、華僑・印僑などのヒト、原料綿花や綿糸、生活雑貨品などのモノ、ポンド（カネ）、海底通信ケーブルによる情報などの移動が起こることとなる。そして、「アジア間貿易」がアジア域内で原料や労働力を調達し、商業ネットワークを形成したという特質を持ち、列強諸国が提供する技術や資本に依存していたという課題を把握させる。

また、戦後の「東アジアの奇跡」では、資源や資本を集約する欧米型発展径路に対して、東アジアは労働力を集約させる技術や制度に、欧米の技術が融合されたことで戦後の東アジアの爆発的な経済成長が生まれたとする杉原（2020）の主張を扱う<sup>(21)</sup>。東アジア型の発展径路は、人的資本の開発によって資源節約型の工業化を実現し、他地域に普及する「普遍性」を持つ特質がある。一方で、地理的な土地や資源の制約をどのように克服するのかという点が、地球温暖化や経済格差などの「現代的な諸課題」と結びつくこととなる。

このような歴史的考察は、「域内経済システム」について、欧米の①資源・資本集約型、東アジアの②労働力集約型の二つの工業化の類型を生み出す。また、「グローバル化」が生み出す光と影の部分に着目することで、未来において志向すべきなのは③グローバル化か④ローカル化かという方向性の論点が生まれる。この「域内経済システム」の類型と「グローバル化」の方向性の論点を整理したのが図2である。

第Ⅲ次では、図2をもとに未来の「域内経済システム」の未来予測を行う。実際には、類型①と②が融合する未来も想定される。たとえば、東アジアは欧米の技術を導入したことから、類型①と分類することも可能であるが、ここでは歴史的考察から相対的には類型②の「グローバル労働集約型」を東アジアの現状の延長線上の未来として捉え、未来を予測する。東アジア全域の高齢化が進行する中で、アフリカやインドなど人口増加が見込まれる地域からの労働力の移動が考えられる。そして、第Ⅳ次では類型①、③、④や類型にとられないその他の未来も含め、多様な未来の「域内経済システム」のあり方を具体的に構想する。

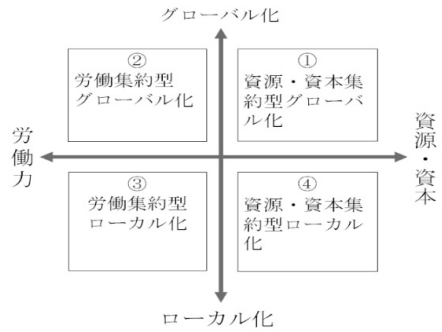


図2 歴史的考察を踏まえた未来の「域内経済システム」の類型

(筆者作成)

「望ましい未来」を選択し、他者の構想した未来について比較や議論を行い、だれが利益を得て、失うことがある未来なのかを考察し、なぜ自分がその未来を実現したいと考えるのかを説明する。「起こりうる未来」を構想することによって、現代的な諸課題への多角的なアプローチと多様な未来のあり方に気付き、認識の再構成（reperception）が生じることとなる。自己の認識の変容の省察を繰り返すことで、未来への主体性を高めていくことができる。

## V. 本研究の成果と課題

本研究の成果として以下の点が挙げられる。

本研究の成果は、未来洞察の学習過程における認識変容のプロセスを明らかにしたうえで、未来洞察型歴史学習の授業を開発したことである。

本研究では歴史学習を未来洞察の基盤として位置づけ、構想した未来像を比較、選択することで相互の価値観を吟味するという学習方法をとった。これによって、生徒は複数の未来を認識し、構想、選択した未来像に向かって主体的に参画する態度を培うことになる。本研究で提案した未来洞察型歴史学習は、歴史学習によって獲得した概念的知識や価値観をどのように未来の構想に結びつけることができるのかという問いに対応し、市民性を育成する歴史学習として意義を持つといえる。

今後の課題としては、開発した授業モデルを実践し、効果検証を図ることである。また、高校の

他の必修科目である「地理総合」や「公共」の未来洞察型の授業開発についても検討を進める。

### 【引用文献】

- (1) 文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』,東洋館出版, pp.12-13.
- (2) 永松靖典(2017)『歴史的思考力を育てる歴史学習のアクティブ・ラーニング』,山川出版社, pp.2-7.
- (3) 溝口和宏(2012)開かれた価値観形成をめざす歴史教育の論理と方法－価値的知識の成長を図る四象限モデルの検討を通して－, 社会科研究(77), pp.1-12. 宮本英征・池野範男・伊藤直哉・草原和博・藤原隆範・湯浅清治(2014)ポスト国民国家へと移行する社会を読み解く次世代カリキュラムの開発研究(I)－言説を構成原理とする高校地理歴史科世界史の場合－, 広島大学 学部・附属学校共同研究紀要(42), pp.49-56.
- (4) 西村豊(2019)歴史的類推を基盤とする歴史の教訓に学ぶ授業モデルの開発－単元「震災復興」を事例として－, 社会系教科教育学研究(32), pp.11-20. 中村怜詞・松尾奈美(2020)地域の現代的課題の探究との接続による歴史授業の改善－隠岐島前高等学校のグローバルヒストリー「島前地域に人が集まるのはなぜか」を中心に－, 社会科研究(93), pp.13-24.
- (5) 白井俊(2020)『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来－エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム－』, ミネルヴァ書房, pp.33-35.
- (6) 熊田禎介(2017)「過去を通して未来を構想する社会科歴史学習の課題と可能性－これからの社会(の形成)のために, 歴史学習はどのように関わることができるのか－」, 井田仁康編『教科教育におけるESDの実践と課題－地理・歴史・公民・社会科－』, 古今書院, pp.95-114.
- (7) デイヴィッド・セルビー, グラハム・パイク(2007)『グローバル・クラスルーム 教室と地球をつなぐアクティビティ教材集』, 明石書店, pp.95-98.
- (8) 澁谷友和(2021)『学位論文題目 小学校社会科未来洞察型授業の開発研究』, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文, p.3.
- (9) Hicks,D.(1994) *EDUCATING FOR THE FUTURE A Practical Classroom Guide*. WWF-UK, p.17.
- (10) Hicks,D.(2001) *Citizenship for the Future-A Practical Classroom Guide-*. WWF-UK, p.22.
- (11) 前掲書(1), p.167.
- (12) 鷺田祐一(2016)『未来洞察のための思考法 シナリオによる問題解決』, 勁草書房, pp.8-14.
- (13) 前掲書(10), pp.17-24.
- (14) 新井宏征(2021)『実践 シナリオ・プランニング』, 日本能率協会マネジメントセンター, pp.64-66.
- (15) 鈴木正行(2015)歴史的思考力の育成をめざす戦後改革の単元開発－戦前・戦後の断絶性と連続性の視点から－, 教科開発学論集(3), pp.77-88.
- (16) 原田智仁(2019)『「歴史総合」をどう構想するか－ねらいと授業化のポイント』, 社会科教育717, 明治図書, pp.4-9.
- (17) 紙田路子(2010)構造主義からの小学校社会科歴史学習の設計－「石見銀山から江戸幕府をみる:江戸システムの確立」の授業設計－, 社会系教科教育学研究(22), pp.101-110. 池野範男(2006)市民社会科歴史教育の授業構成, 社会科研究(64), pp.51-60.
- (18) 岩野清美(2006)「経済を通して社会がわかる」中学校社会科の授業構成－岩井克人氏の経済認識を中心として－, 社会系教科教育学研究(18), pp.83-90. 谷口康治(2002)「移動と交流」に着目した世界史授業開発－近代史単元「一体化する世界」の場合, 社会系教科教育学研究(14), pp.63-70.
- (19) 石井菜穂子(2021)「この10年が人類生存の分岐点 地球という『人類の共有財産』(グローバル・コモンズ)を守るために」, 東京大学未来社会協創推進本部『東大×SDGs 先端知からみえてくる未来のカタチ』, 山川出版社, p.11-14
- (20) 前掲書(5), pp.70-74.
- (21) 杉原薫(2020)『世界史のなかの東アジアの奇跡』, 名古屋大学出版, pp.651-676.